

井上奥本家文書解題

東 昇

1 文書の調査過程

井上奥本家文書は、舞鶴市井上元氏が所蔵する合計 3421 件 3594 点の文書群である。奥本とは後述するが、井上家の屋号である。文書の調査は、2016 年 12 月 9 日小室智子氏（舞鶴市郷土資料館）とともに、井上家へ事前調査に訪れ、12 月 26 日京都府立大学歴史学科文化情報学ゼミ生と舞鶴地方史研究会会員が、目録作成、写真撮影を開始した。その後、主に舞鶴地方史研究会が番号付与、目録作成、ゼミ生が写真撮影を分担し、2018 年 11 月 12 日全点終了した。その後、2019 年 1 月から目録の見直し、1 月 21 日に井上家において再調査を行った。また翻刻の内、近世の山論文書については、2018 年度後期の文化情報学実習Ⅱにおいてゼミ生が解読し、近代の献立、日露戦争期の書簡は、舞鶴地方史研究会会員が行った。

2 文書の概要

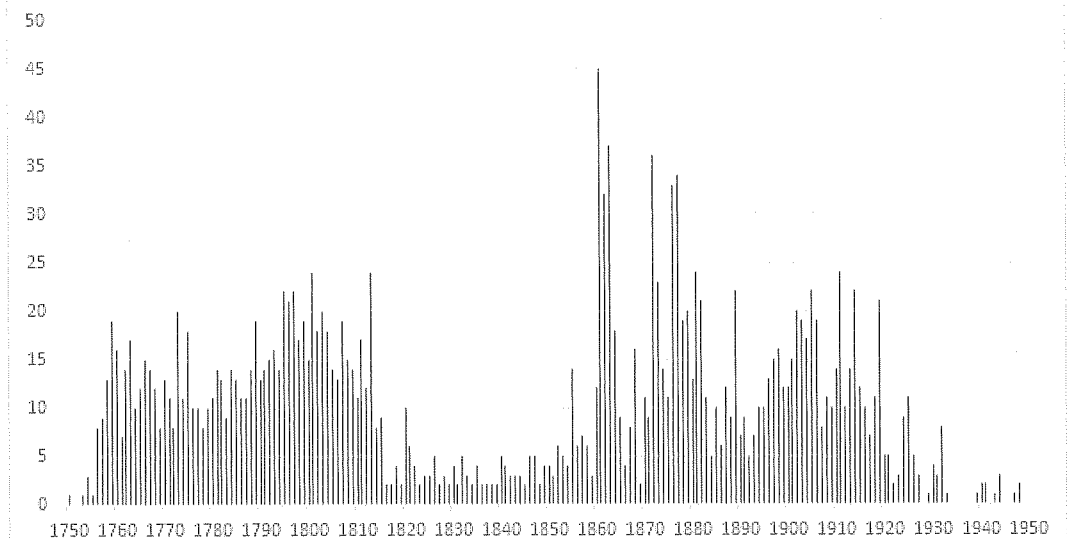
井上奥本家文書は、蔵の 2 階、長持 3、筆笥 1 に納められており、長持 1（文書番号 1～873、以下同）はダンボール箱 9、長持 2（874～2458）はダンボール・塗箱計 10、筆笥（2459～3111）は引き出し 5、小長持（3112～3421）と区別されている。

文書を収納別にみると、長持 1 は、ほぼ近世の横帳類、長持 2 は、近世の一紙物類、明治大正期の文書である。この長持 2 棹は、大部分が形態、表題で分類されており、文書作成後いずれかの時期に整理されたと考えられる。筆笥は、1 段目（2459～2555）典籍、近世の一紙物類、2 段目（2556～2637）明治大正期の稲刈数覚帳、田畑作付人別帳、日記の横帳類、3 段目（2639～2846、3405～3408）明治大正期の建物売買、賃貸関係、後見人書類、4 段目（2847～3005）明治大正期の金品出納証、明治 10 年代の余部校関係、明治 38 年（1905）日露戦争に看護長として出征した井上奥本書簡、5 段目（3006～3111）明治 30 年代の新市街地形成期の建物落成届などがある。小長持は、明治 10 年代の地券が 143 点と大部分を占める。この筆笥と小長持は、形態別保管といえるが、ある程度内容別にまとめられており、袋など原状維持されていることから、作成・保管時のものと考えられる。

文書群を年代別にみると、年紀が判明するものが全体の 61%にあたる 2193 点、内近世（1607～1867 年）1211 点（55%）、近代（1868 年以降）982 点（45%）と近世が多い（図 1）。近世文書で最も古いものは、慶長 7 年（1602）の慶長検地帳と考えられる「丹州加佐郡大内倉谷村御検地帳」（791）である。この検地帳は、余部上村のもの

ではなく、戦後、別の家から譲渡されたと伝えられているが、表紙に「井上次郎助」とあることから、井上家との関係も想定した可能性もある。

図1 井上奥本家文書年代分布 (1750~1950)



注：1877 (107件)・1881 (27件)の地券数は含んでいない

3 余部上村の概要

井上家が居住してきた舞鶴市余部上は、古代は余部郷、中世は余部里庄に含まれ、京都の鹿王院領であった（以下、『日本歴史地名大系』京都府の地名、1981を参照）。元禄9年（1696）「土目録」（821、2530）によると、石高は294石7斗1升、田275石1斗9升5合、畝20町8反2畝22歩、畠19石5斗1升5合、畝6町5反9畝22歩半と、田が94%を占めていた。小物成は夫米12石9斗6升7合3勺、竈役米5斗5升、鍛冶炭代米1斗2升9勺、諸運上は家運上22匁5分、入木240束は15軒分、雉子代10匁、次物は大豆4石8斗6升3合、胡麻6斗4升9合、麻苧6貫630目であった。

田辺藩士が享保期に編さんした地誌「旧語集」によると、長浜・余部下・北吸・和田・下安久とともに高倉神社を氏神とした。また余部下村の普明国師草創と伝える雲門寺が、余部上・余部下・長浜・和田・北吸の寺と記されている（『舞鶴市史』史料編、1973）。近世、田辺藩領に属し、大庄屋は池之内組であった（『舞鶴市史』通史編上、1993）。

明治に入ると、明治2年（1869）田辺藩が舞鶴藩、同4年7月舞鶴県、11月豊岡県編入、同9年京都府、宮津支庁管轄となった。明治前期の余部上村については、明治17～18年頃京都府が編纂した「丹後国加佐郡村誌」に詳しい（「丹後国加佐郡村誌」3、京都府立京都学・歴彩館所蔵、京都府地誌34）。戸数は49戸、社1戸（小西神社、祭神應神天皇、祭日6月6日）の計50戸、人数は男119人・女95人の計214人、1戸あたり4.3人である。牛は、牡牛5頭、牝牛10頭、計15頭を所有していた。田畑・税などの項目として、税地は田28町8反19歩、畑6町4反7畝9歩、宅地1町7反19歩、計36町9反8畝21歩、荒地6畝11歩とある。「土目録」と比較して、畑は変化ないが田は8町、約1.4倍増加している。それらの貢租は、地租462円3銭6厘、山税81銭5厘、計462円85銭1厘である。川は余部川が榎峠から余部下村境まで流れている。土地の色は赤黒、質は下等、稲梁に適せず桑茶がよい、水利が不便で時々旱魃になる。物産は、大豆3石6斗、菜種3石1斗2升、民業は男女ともに農業専業とある。参考として、郡

村誌調査の前提となった、明治16年「皇国地誌編輯之例則調査」(2234)の翻刻を掲載する(翻刻④)。

明治22年4月余部上村他11村が合併し余内村、舞鶴鎮守府が開設されると市街地となり、明治35年6月には余部町として分立した。その後、大正8年(1919)に中舞鶴町と改称、昭和13年(1938)新舞鶴町他と合併し東舞鶴市、昭和18年舞鶴市となる。

4 井上家の概要

井上家は、近代作成されたと考えられるペン書きの「[先祖戒名調]」(3199)によると、最も古い当主は天和元年(1681)死去の七右衛門である。その後、3人同名の七郎右衛門が続き、3人目の七郎右衛門が安永7年(1778)54歳で死去している。つぎに七郎左衛門(文化13年(1816)70歳没)、七郎左衛門(万延2年(1861)74歳没)、七郎右衛門と続く。文書には、寛保2年(1742)「[物成帳]」(1407)の七郎右衛門が初出である。

近代では、明治9年「[家族書]」(2912)によると、井上七郎左衛門の息子として、奥本・豊治郎兄弟が記される。現当主の話によると、近世最後の七郎右衛門と明治9年の七郎左衛門は同一人物である。つぎの豊治郎は、若狭国大飯郡石山村武藤團の息子で、七郎右衛門娘たきの夫である。豊治郎は大正14年1月30日没、文書でも明治9～大正13年に登場する。つぎの奥本は明治4年10月18日生、昭和8年4月20日没である。豊治郎から奥本への交代は、明治10年5月10日「地券」(3261)の裏書によると、明治17年5月15日奥本への家督相続の所有者変更から判明する。文書では文化6～昭和6年の長期間登場するが、近世の奥本は、明治の奥本本人ではなく、家名(屋号)ある。なお明治29年5月「軍港市街記」(2201)他の井上春光は、奥本の雅号とのことである。

奥本がまとめた大正13年「井上家重宝射術皆伝巻物写し」(3164)によると、井上氏宗家主人清兵衛が、「射術皆伝巻物」15巻を分割して相続させた。分家井上清兵衛の保管分は散逸したが、奥本家の8巻(3156～3163)は現存すると記す。そしてこの巻物を、元禄9年「土目録」(821、2530)と共に「当家重代宝物」とするよう記している。現存する文書群にも17世紀のものは、この土目録と、貞享2年(1685)「若狭国佐柿国吉籠城之覚」(1995)、慶長検地帳の4点であり、余部上村に関する土目録を「当家重代宝物」としていることから、奥本は文書全体を調査していた可能性がある。

また「井上家重宝射術皆伝巻物写し」に挟まれている、「乍恐奉願上口上之覚」は、万延2年7月余部上村清兵衛から奉行所へ出された文書の写である。そこには「余部上村清兵衛、同村前者七郎左衛門と申候、且今之奥本と同家に御座候へ共、本家相分り不申候」とあり、清兵衛は奥本家と同家であるが、本家はいずれの家か不明とある。続けて、そのことについて両家で争論はしていない、清兵衛以前の者が高100石を預っていたと伝えている。ただし御弓印可・系図は焼失し、雲門寺の吟味ではここ200年位はわかるが、それ以前は不明と回答があった。そのため上様に本家調査を依頼したいとある。清兵衛は、井上家は100石取の武士で田辺藩士ではないかと推定しており、藩の文書での解明と本家の確証を得たいと考えている。先述した「[先祖戒名調]」(3199)には、元禄12年没の清兵衛母が記載されており一族といえる。

このほか、井上家の家政に関する文書も多いが、明治43年「おすゑ縁附心覚帳」(2993)他、婚姻などに関する献立関連の資料が多く翻刻に掲載した(翻刻⑬～⑳)。なお、同じ献立資料として、上井壱雄氏が「史料紹介『井上奥本家文書』」(『舞鶴地方史研究』50、2019)で「万事記録覚帳」(314-5)を紹介している。

5 井上家の役職

井上家は、近世から明治にかけて余部上村の村役人を勤めた。村役人として最初に文書に登場するのは、年寄七郎右衛門であり、宝暦4年(1754)12月「永代売渡申田地之事」(1571)から宝暦6年11月「田地本物書入借用申米之事」(1652)までである。翌宝暦7年8月「余部上村御年貢米小通」(269)には庄屋七郎左衛門とあり、文化12年まで庄屋七郎左衛門が登場する。このことから七郎右衛門が年寄、初代七郎左衛門が庄屋となり死去まで庄屋を勤めた。前述の「〔先祖戒名調〕」(3199)によると、庄屋は清兵衛(～享保7(1722))、弥五兵衛(～宝暦4)、七郎左衛門(宝暦4～)とあることから、七郎左衛門前後は別の家であった。また寛政・享和期には、寛政3年(1791)8月16日「亥之北吸村御年貢納惣百姓小通」(152-1)他、40点程の北吸村文書があり、余部下村庄屋兵左衛門とともに北吸村を兼帯したと考えられる。兵左衛門から北吸村年寄にあてた、享和2年(1802)8月10日「相渡申帳面之覚」(1604、翻刻①)から、文書の受け渡しがあったことがわかる。この時期には、周辺村との山論も発生しており、宝暦10年余部下村、文化10年上安村、文政期北吸村との文書が現存する(翻刻②～⑩)。

文久元年(1861)井上家が再度庄屋に就任した。関連文書として、同年11月22日「覚」(2529、翻刻⑫)は前庄屋武兵衛から庄屋奥本、同市左衛門へ、村方文書や道具を譲った目録、11月「万事記録覚帳」(1390、翻刻⑬)には、庄屋役披露儀式に必要な白米、酒などの量・代金、献立、役の任命が17日であったことが記される。同年の文書数も44件となり、庄屋奥本と記載された文書が増えている。この時期、市左衛門が同役として併記されており2人体制であった。その後、文久4年18件と減少するが、同年庄屋を交代している。

文書数をみても、庄屋期の宝暦7～文化12年は年平均文書14件、非庄屋期の文化13～万延元年4件、庄屋期の文久期33件と、庄屋勤務による文書数の増加がみられる。これらは、ほぼ恒例化した藩による介抱米の差紙が、正徳3年(1713)以外、宝暦7～文化11年、文久3年と、井上家の庄屋期に限定して現存していることからわかる。

近代にはいると、奥本は明治5年余部上村副戸長、明治7、12年に戸長となっている。また豊治郎は、明治10～15年戸長、戸長制度廃止後、明治21～22年余部上村総代を井上奥本(2代目)が勤めている。明治22年余内村合併後は、明治29年旧12月29日「村諸帳面并諸道具附送簿」(2243)、明治30年旧6月18日「村諸帳面并諸道具受取簿」(2051)によると、明治30年1～6月には区長を勤めた。「軍港市街記」(2201)には、明治35年6月1日余部町の町長代理者、中舞鶴町役場編の昭和7年『置町参拾年史』(2334)では、同年9月～明治36年1月助役、明治40年4月～大正4年第12区長、明治35年8月初期、大正3年8月第1回、大正7年8月第2回、大正11年8月第3回の議員を勤め、大正15年10月には功労者となっている。

奥本は、日露戦争期、明治38年5月書簡(2922、翻刻⑭⑮)「第10師団臨時衛生隊附井上奥本」、同年8月15日書簡(2925)「出征第4師団第16補助輪卒隊附看護長井上奥本」とあり、中国大陸へ出征したことがわかる。また明治39年9月20日(3183)陸軍2等看護長勲8等井上奥本への明治37.8年戦役に関する感謝状が出されている。

6 国語学者井上奥本

井上奥本は、区長や町長を勤める一方で、和歌の会を開催するなど文芸にも関心を持ち、特に在野の国語学者としても業績が知られている(図2)。金田一春彦『国語アクセントの史的研究 原理と方法』(塙書房、1974)によると、奥本は、「日本語アクセント

史の研究の開祖」として紹介される。奥本の執筆した論文は、「語調原理序論」(『国学院雑誌』22巻1-4,7-10号、1916)、「語調の基礎と其の形式」(『国学院雑誌』27巻8-9号、1921)、「日本語調学小史」(『音声の研究』2、1928)、「舞鶴地方のアクセント」(『音声の研究』3、1930)などがある(大阪大学岡島昭浩氏のWEB「国語学論文集」、京都府立大学附属図書館)。井上家文書には、奥本の研究資料の大正7年4月「記紀中の国語の声符」(3120)や大正8年11月「蔵書目録」(2016)、元禄13年風観齋施点「伊勢物語」(3113)、寛政7年9月『重刻発字便蒙解』(3114)などが所蔵されている。

また「大正三年一月名家手簡」(3134～3155)として、学問の交流のあった当時の学者の書簡、葉書が現存する。点数が多いのは、国語学・国文学者の吉澤義則(大正8年京都帝国大学教授、書簡の時期に近い所属など、以下同、『国史大辞典』吉川弘文館、1997)、音楽教育と吃音矯正研究者の伊沢修二の各3点である。その他各1点、言語学者の新村出(明治42年京都帝国大学教授)、方言学者の東條操(大正2年東京帝国大学文科大学助手)、国語学者の保科孝一(明治35年東京高等師範学校教授、東京帝国大学助教授、改訂新版『世界大百科事典』平凡社、2014)、歴史地理学者の吉田東伍(明治34年東京専門学校、大正7年死去、『日本大百科全書』小学館、1994)、言語学者の藤岡勝二(明治43年東京帝国大学教授、『日本人名大辞典』講談社、2001)、国語学者で『言海』を編集した大槻文彦(明治44年帝国学士院会員)、国文学者の三矢重松(國學院大学教授、『日本人名大辞典』)、保科とともに東京帝国大学の上田万年の助手を勤め、『日本文学者年表』(大日本図書、1902)など多数の著作のある赤堀又次郎、歌人・伯爵の冷泉為系である。この他、本目録以外に奥本の研究資料が保管されているが未整理であり、今後の調査研究に期したい。なお奥本の息子井上充夫(1918～2002)は、戦後、横浜国立大学教授となり、建築史研究者として活躍している。

謝 辞

本解題の執筆にあたり、井上奥本の国語学における業績、関係者について、本学文学部日本・中国文学科藤原英城教授、鳴海伸一准教授、藤本灯講師、大阪大学大学院文学研究科岡島昭浩教授に、数多くのご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

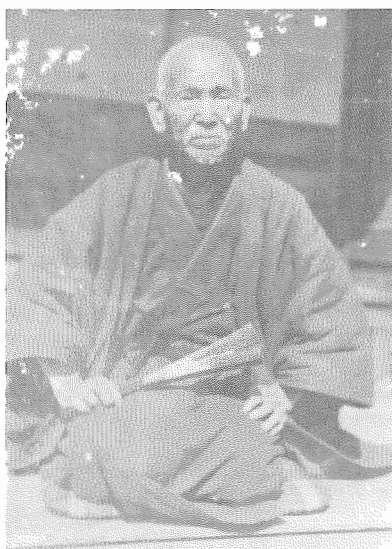


図2 井上奥本写真

表紙の解説

	1	2	3
5		4	
(裏)		(表)	

- 1 「舞鶴の歴史アラカルト」パンフレット
- 2 文書蔵出し調査風景 東昇撮影
- 3 舞鶴地方史研究会との共同調査 東昇撮影
- 4 舞鶴クレインブリッジ 松岡秀雄氏撮影
- 5 東舞鶴高校での授業風景 廣瀬邦彦氏撮影

京都府立大学文化遺産叢書（2008～）

- 1 南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究
- 2 近世伊予越智島地域における流動する人・物・情報
—御用日記・諸願控の総合的研究—
- 3 八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図—地域文化遺産の情報化—
- 4 八幡地域の古文書・石造物・景観—地域文化遺産の情報化—
- 5 丹後・宮津の街道と信仰
- 6 城陽市域の地域文化遺産—神社・街道の文化遺産と景観—
- 7 熊野の信仰と景観—宗教遺産学の試み—
- 8 石見銀山域の歴史と景観—世界遺産と地域遺産—
- 9 和束地域の歴史と文化遺産
- 10 八幡・南山城地域の寺院資料と信仰—京都府歴史資料調査—
- 11 舞鶴の文化遺産と活用
- 12 「丹後の海」の歴史と文化
- 13 古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的研究
- 14 舞鶴・京丹後地域の文化遺産
- 15 沖縄の宗教・葬送儀礼・戦没者慰霊



京都府立大学文化遺産叢書 第16集
舞鶴の地域連携と世代間交流
井上奥本家文書調査報告

編集 東 昇
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
発行日 2019年3月30日
印刷